

環境省 自然環境局



生物多様性センター
Biodiversity Center of Japan



イラスト：永田信行

表紙のイラスト

日本各地の生物多様性を1枚の絵巻にして表現した「つながりんぐ」から一部を抜粋しました。全体は展示室にてご覧いただくことができます。北海道から沖縄まで、300種以上の動植物が描かれており、日本の列島の生きものたちのつながりが表現されています。



生物多様性センターからのお知らせ

● 東北地方太平洋沿岸地域における重要な自然の情報を地図化した「重要自然マップ」を作成しました

東日本大震災及びそれに伴う津波（以下、「震災」という。）は、人々の生活のみならず、震災地域の自然環境にも大きく影響を与えました。その一方で、被災による「消失」だけでなく、震災による「新たな環境の創出」もあり、被災地における自然環境は日々変化しています。

生物多様性センターでは、震災前後の自然環境の変化を把握するため、平成 23 年度から沿岸域や植生の調査を実施するとともに他機関が行っている調査の情報収集などを行ってきました。これらの成果は、多くの人たちに広く共有し活用してもらう必要があることから、昨年 10 月にリニューアルしたウェブサイト「しおかぜ自然環境ログ」で調査報告書や、その概要を一般向けにとりまとめたパンフレット「東日本大震災が沿岸地域の自然環境に及ぼした影響」などを公開しています。

ただ、これらの成果の多くは専門的な内容が多く、行政や一般の方には使いにくいとの声があったことから、地域の復興事業などにより活用していただくために、これらの成果を基に震災地域における重要な自然の情報を地図化した「重要自然マップ」を作成しました。「重要自然マップ」は国の関係機関や各自治体に配布するとともに、「しおかぜ自然環境ログ」でも公開しています。



重要自然マップ（三陸南部）

しおかぜ自然環境ログ URL <http://www.shiokaze.biodic.go.jp/>

● モニタリングサイト 1000 ウェブサイトリニューアルのお知らせ

生物多様性センターのウェブサイトで公開されているモニタリングサイト 1000 のウェブサイトがリニューアルしました。

全体のデザインを一新し、トップページの地図から各モニタリングサイトの位置を確認できるようになった他、モニタリングしている生態系ごとに調査内容や調査結果へのアクセスがしやすくなりました。ぜひご覧ください。



モニタリングサイト 1000 URL <http://www.biodic.go.jp/moni1000/index.html>

● 「いきものログ」に参加してみませんか？ ～ 「いきものログ」専用アプリで簡単報告～

インターネット上で生物情報を集め、共有する新しいウェブサイト「いきものログ」を昨年10月から公開しています。「いきものログ」は、誰でも生きものの目撃情報を登録することができます。

集められた情報は、生物名を指定して検索できるほか、分布図やグラフとして表示することができ、データのダウンロードも可能です。

「いきものログ」への生きものの目撃情報の登録は、インターネットに接続可能なパソコンからだけでなく、「いきものログ」専用アプリを利用することで、スマートフォンやタブレット端末からも簡単に行うことが可能です。この「いきものログ」専用アプリを利用すれば、端末のGPS情報が記録された写真から位置情報を読み取り、生きものを目撃した場所を正確に記録していくことができるほか、調査地が電波の届かない場所でも、事前に調査地の地図をダウンロードしておけば端末の中に一時的に情報を蓄積して調査終了後に「いきものログ」に登録することも可能です。

簡単・便利な「いきものログ」専用アプリを利用して身近な環境に息づく生きものの目撃情報を投稿してみませんか。生物調査時の野帳や、お散歩で見つけた生きものの記録ツールとしての活用など、様々な場所で「いきものログ」専用アプリをご活用ください。

「いきものログ」は多くの方々の参加により、「生きもの地図」を描いていくシステムですので、みなさまの積極的な参加をお願いします。



「いきものログ」専用アプリの画面イメージ。調査名を選択してデータを入力することで、簡単に生きものの目撃情報を報告することができます。

● しおかぜ自然環境調査への参加を募集しています

震災後の生きものの状況を把握するために、皆さんに参加していただく、「しおかぜ自然環境調査」を実施しています。この調査は、東日本大震災の被害があった地域を中心に、全国から対象とする20種類の生き物の情報を集めています。一般の方からの報告を蓄積することで各種の分布の状況を地図上に表現して共有するものです。調査対象種は、できるだけ観察、識別しやすいものや震災後の環境に特徴的なものなどを選定しています。

本調査の実施にあたっては調査の手引きとなる「しおかぜ学習帳」を作成しました。対象種がすんでいそうな場所や識別のポイントなどについてわかりやすく解説し、野外での観察をサポートするとともに親しみやすいデザインとなっており、楽しんでいただける内容となっています。学校や地域の環境学習にも役立つものですので、学校関係者、関係機関の皆さんにも大いに活用していただけることを期待しています。

結果の考察にあたっては、できるだけ多くの報告が必要なので震災があった地域はもちろん、全国の皆さんからの報告をお待ちしています。



しおかぜ自然環境調査
URL http://www.biodic.go.jp/shiokaze_chosa/



● 2万5千分の1植生図 約68%の整備が完了しました

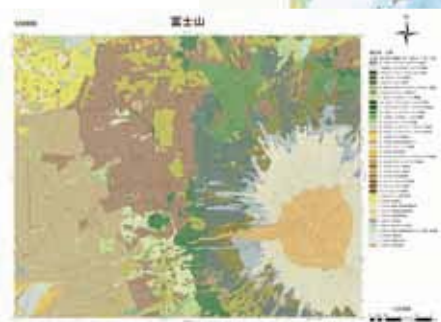
生物多様性センターでは、自然環境保全基礎調査の一環として植生調査を昭和48年以降、継続的に実施し、平成11年度からは2万5千分の1植生図の全国整備を進めています。

植生図とは、植物のまとまりを植物群落として区分し、それらの面的な配分状況を地図化したものです。地域の地史、気候、地質、地形さらには人間を含む他の生物との相互作用の結果などその地域の環境特性を反映しており、国土計画、地域開発、産業立地などのためのアセスメントや自然環境の保護・復元・維持の計画作成のための不可欠な資料として様々な方面で利用されています。

平成25年度は、国土の約3%分の整備が完了し、平成25年3月末時点で、全国の約68%の植生図が整備されました。早期の全国整備が求められており、未整備地域については、整備方法を工夫するなどして精度を維持した上での効率的な整備を目指しています。

なお、整備済みの植生図は生物多様性センターウェブサイト内の植生調査情報提供ページで誰でも閲覧、ダウンロードすることができます。

植生調査情報提供ウェブサイト



1/25,000 植生図「富士山」

植生調査情報提供ページ URL <http://www.vegetation.biodic.go.jp/>

● 「新宿御苑みどりフェスタ」に出展しました

毎年4月29日に開催される「新宿御苑みどりフェスタ」に今年も出展し、生物多様性に関するパネルや標本の展示を行いました。

パネルの展示では、生物多様性センターの業務を紹介したパネルのほか、生物多様性センター脇の森に設置したセンサーカメラが捉えた野鳥や動物の写真も展示しました。

また、標本の展示では、ニホンザル、シカ、ムササビ、タヌキ、ツキノワグマなど日本の代表的な野生動物のはく製7点を展示、誰でも自由に触ることができるようにしたため、訪れた人の注目を集めていました。



みどりフェスタ出展の様子



● JICA 研修「湿地コース」研修員受け入れ

生物多様性センターでは世界の生物多様性の保全に貢献するため様々な国際協力を行っており、その一環として JICA 研修の研修員をはじめ、海外から多くの来訪者を受け入れています。

6月12日及び13日には、JICAが実施している「湿地コース」の研修員6名（メキシコ、ウガンダ、マレーシア、コスタリカ）が来訪、自然環境保全基礎調査やモニタリングサイト1000など生物多様性センターが行っている調査や情報発信の仕組みに関する講義と意見交換を行いました。展示施設などの見学も実施し、日本の生物多様性センターが果たす役割について理解を深めてもらいました。



研修風景

「トキの野生復帰特別展」を開催しました

国内での野生絶滅を経て、野生復帰の取り組みが進められているトキ。生物多様性センターでは7月15日(火)～9月30日(火)の間、「トキの野生復帰特別展」を開催しました。普段は非公開の、1981年に野生下で捕獲された日本産最後の5羽のうちの1羽である「キイロ」の剥製標本と骨格標本に加えて、トキの巣や卵殻、羽根などを特別展示しました。またトキの歴史、生態、野生復帰の取り組みをパネルで紹介するほか、佐渡の野生復帰ステーションの順化ケージのライブ中継、佐渡トキ保護センターの仕事を紹介するビデオ上映などを行いました。



トキ（「キイロ」本剥製（生物多様性センター所蔵）

生物多様性センターに収蔵している標本の紹介 第24回

和名 / ツシマヤマネコ
RDB カテゴリー / 絶滅危惧 I A類
学名 / *Prionailurus bengalensis euptilurus*
分類 / ネコ目 ネコ科



ツシマヤマネコ

(写真提供 環境省対馬野生生物保護センター)

里とくらししてきた「とらやま」

ツシマヤマネコは全長約70～80cm、体重約3～4kgで、胴長短足、額の白黒の縦じま模様と体長の4分の1ほどの太くて長い尾が特徴です。耳はイエネコより丸く、耳の裏には虎耳状斑(こじじょうはん)とよばれる白い斑点があります。長崎県対馬にのみ生息し、東南アジアから中国、朝鮮半島に広く分布するベンガルヤマネコの亜種とされています。標高200m以下の森林、田畑、湿地などに主に生息し、肉食でネズミやモグラなど小型哺乳類のほか、季節によって鳥類、昆虫類、両生類、魚類などを食べます。対馬では古くから「とらやま(虎毛のやまねこ)」、「とらげ」として親しまれており、時折、水田に姿をあらわすことから「田ねこ」とも呼ばれてきました。

ツシマヤマネコと交通事故

ツシマヤマネコは、1960年代までは対馬全域に約300頭が生息していたと考えられています。その後、道路の開発や針葉樹の植林による餌動物の生息環境の変化、交通事故などによって減少し、現在では北部の上島を中心に100頭弱が生息していると推定されています。ツシマヤマネコは、4～6月に土穴や木の根元のくぼみなどで平均2頭の仔を産みます。仔は生後半年ほどで親離れをしますが、親離れの時期は最も交通事故の危険性が高まる時期でもあります。1992年から2013年までに70頭のツシマヤマネコの交通事故死が確認されていますが、その3分の2が9～12月に集中しています。生物多様性センターで所蔵している標本(右上図)の個体も、死因は交通事故と考えられています。現在、対馬野生生物保護センターとNPOなどが協力して、普及啓発による交通事故の防止対策や、事故にあった個体の治療・リハビリ、また野生復帰の取り組みが行われています。



ツシマヤマネコ本剥製(生物多様性センター所蔵)

下島での野生復帰に向けた取り組み

対馬南部の下島では1984年以降ツシマヤマネコの姿が確認されずにいました。しかし2007年、下島の巖原町で23年ぶりに写真によって生息が確認され、その後も追跡調査によりわずかながらツシマヤマネコが生息していることが確認されました。現在、巖原町には下島における野生復帰の技術開発のための施設の整備が進んでいます。

【参考文献】

阿部永(監修)『日本の哺乳類(改訂2版)』、東海大学出版会、2008年、pp92～93

ツシマヤマネコBOOK編集委員会(著)『ツシマヤマネコ 対話の森で、野生との共存をめざして』、長崎新聞社、2008年、pp43～148

環境省対馬野生生物保護センターホームページ <http://kyushu.env.go.jp/twcc/> (2014/6/20現在)

施設紹介

「生物多様性まつり 2014」

の開催報告

うちっちといきもん

～生きものたちと上手につきあうには？～

「生物多様性まつり」は、生命のつながりについて楽しく学んでもらうことを目的として、毎年夏に開催されるイベントです。今年のテーマは「うちっちといきもん」です。うちっちといきもんとは甲州弁で「私たちと生きもの」を表しています。パネル展示やクラフト、標本収蔵庫ツアーを通じて、私たちと生きものたちがともに生きていくためにはどうすれば良いかを紹介しました。



生物多様性まつりの様子

展示室

生物多様性センターでは、生物多様性に関する「？」を解決するヒントが詰まった展示室を設けています。生物多様性を保全するたことの大切さをわかりやすく伝えます。



展示室ロビー

ふくろう文庫では、生物多様性に関する本を読むことができます。また、つながりの木には、生きものと一緒に生きていくためにみんなができることを書いてもらっています。



図書資料閲覧室

生物多様性センターでは、生物多様性に関する図書や各種文献などを収集・保管しています。これらの図書や文献資料は、図書資料閲覧室で閲覧することができます。



利用案内

- 開館時間 午前9時～午後5時
- 休館日 冬季期間（12月～4月）の土日祝日
年末年始（12月29日～1月3日）
- 入館料 無料
- 団体でご利用される場合は事前にご連絡をお願いします。
- 図書資料の貸出しは行っていません。

交通案内

- 富士急行河口湖駅または中央高速バス河口湖駅下車タクシーで約15分
- 中央自動車道河口湖ICまたは東富士五湖道路富士吉田ICより車で約15分



環境省 自然環境局

生物多様性センター
Biodiversity Center of Japan

〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田剣丸尾 5597-1

ウェブサイト URL <http://www.biodic.go.jp/>

TEL 0555-72-6031 FAX 0555-72-6032・6035

